

---

 情 報
 

---

## 「ことばクリニック」開設の意義

伊東 節子

明倫短期大学歯科衛生士学科専攻科

保健言語聴覚学専攻

明倫短期大学附属歯科診療所, ことばクリニック

「ことばクリニック」が2004年10月1日に本学附属歯科診療所に開設された。これはことばや聞こえに障害のある患児(者)への支援のための施設であり、この開設は本学保健言語聴覚学専攻科開設以来の懸案であった。

「ことばクリニック」で扱うことばや聞こえの障害は、乳幼児から老年者にわたり、先天性にあるいは後天性に起こりうる。そのような言語障害となる原因とは歯科・口腔外科系、医科系、環境系など、多岐に亘ってみられる。

言語障害を分類して説明すると、1) 耳で聞いた特徴から、構音障害、話し声の異常、話しことばのリズムの異常、2) ことばの発達という面から、ことばの発達の遅れ、3) 原因または伴っている疾患からいえば、口蓋裂に伴う場合、脳の言語中枢の障害に起因する場合、情緒の問題で話さない場合、聴覚障害、脳性麻痺に伴う場合、声帯を失って声が出なくなる無喉頭(田口, 1974) などであり、したがって言語障害の症状もさまざまに現れる。

言語障害の治療には、原因が種々にわたるためその方法に関しても、医科的、歯科的療法がとられる場合、あるいは母親指導を行い言語環境を是正する、子どもの発達に相応して能力をのばす、構音治療(いわゆる発音治療)を実施するなどがあげられる。これらの言語治療の一つに歯科医学的方法として、義歯を応用した補綴的技法があげられ、これはある場合には手術に代わる方法となるなど、言語治療の方法としては重要な位置を占めている。

言語聴覚学領域は、いまだ一般的理解にいたっていないとは言い難い状況下にある。しかし本学は歯科医療の一端を担う歯科衛生士、歯科技工士の養成校であり、また歯科診療所が併設されているというそのような環境下にある本施設「ことばクリニック」にとって、言語障害・治療について理解をえる恩恵は多大である。

したがって、本施設は歯科診療所内に開設された言語治療機関として、今後口腔顎顔面領域の異常に伴う言語障害患者の来室も少なくないと考えられる。そのような事情も考慮し、「ことばクリニック」の診療内

容・運営については、1) 口蓋裂診療班の結成、2) 症例検討会の実施を主軸とし、前者は昨(2004)年11月に既に結成された。また後者に関しても1か月に1回実施する「ことばクリニック」会議において実施している。さらに本施設の開設には本学専攻科保健言語聴覚学専攻学生の臨床実習機関としてその機能を果たすことを目的とし、これに関しても開設1ヵ月時から既にその役割を果たしている。

「ことばクリニック」の人事構成は、室長(兼任)および言語聴覚士3名(専任言語聴覚士1名、兼任言語聴覚士2名)からなる。開室以来、来室患者状況は順調である。このことは、本学理事会、教職員ならびに歯科診療所関係各位による理解・協力体制の賜であり、また専任言語聴覚士のこれまで携わってきた諸処の機関からのご協力によるものと考えている。

特に、「ことばクリニック」の診療内容の一つである「口蓋裂診療班」に関しては、世界的規模で読者を有する口蓋裂専門誌として権威のある"The Cleft Palate-Craniofacial Journal"(発行元:アメリカ)ニュースレター編集部から、昨(2004)年10月、我が国では初めての原稿依頼が著者にあった。そのため「Meirin College Cleft Palate Team, Niigata, JAPAN (by Setsuko Itoh)」と題して昨年11月、既に原稿を送っている。

したがって、本学の「ことばクリニック」の所在は、この「口蓋裂診療班」の記事が掲載される"The Cleft Palate-Craniofacial Journal"のニュースレターを通してまもなく世界中に周知されることになるであろう。それに加えて、私たち「ことばクリニック」のメンバーは地域に根ざし、地道に言語障害患者への支援を今後さらに続けていく所存であり、本施設の開設は本学にとって、また地域社会にとって、存在意義は大きいものとする。

## 日本歯科技工学会第26回学術大会開催報告

丸山 満 歯科技工士学科

去る、平成16年7月31日、8月1日の2日間にわたり、日本歯科技工学会26回学術大会が、大会長に明倫短期大学の河邊学長のもとで、新潟市の朱鷺メッセにて開催されました。開催にあたり、準備委員長に新潟県歯科技工士会会長の小浦方氏のもとで、新潟県歯科技工士会会員、新潟大学歯学部附属歯科技工士学校、本学歯科技工士学科の教員が協力し、一年前から準備